

解説 ロバート・パーカー先生の講演に際して

栗原麻子

2017年3月、オックスフォード大学古典学部のロバート・パーカー名誉教授を迎え、大阪・京都・東京で、順次、講演がおこなわれた。パーカー先生を日本へお招きすることは、その知性と誠実なお人柄に恩恵を受けた日本人研究者の長年の願望であった。しかしながら6年前、いよいよ招聘が実現するかと思われた2011年の3月に、日本は東日本大震災と福島第二原子力発電所の放射能事故という二重の惨事に見舞われた。パーカー先生はこのとき、ぎりぎりまで渡航の可能性を探られたが、とうとう断念され、来日は無期延期となってしまったのである。

そのときにお話しいただくはずであった原稿のうち、京都で予定されていた講演 'Religion without a Church: religious authority in Greece' の内容は、ほぼ同時期に公刊された *On Greek Religion* (Cornell University Press, 2011) に収められている。また、東京で予定されていた講演の原稿は、特別寄稿・ロバート・C・T・パーカー (佐藤昇訳) 「古代ギリシアの供犠：大問題」(『クリオ』25, 2011年, 63-73ページ) として掲載済である。大阪で予定されていた「法と誓い」をめぐるセミナーを除けば、講演の内容は、日本の聴衆の手に、文字のかたちで届くことは届いたのである。しかし文字から情報を読み取ることと、肉声で伝えられる情報を対面で受け取ることのあいだには大きな違いがある。とりわけパーカー先生の文体はシンプルでありながらきわめてニュアンスに富み、その含意は、肉声を通してはじめて了解されるようにも思われるのである。たとえばパーカー先生が論文中にときおり挿入する 'perhaps' という表現は、いいかげんな「たぶん」などというものではなく、論証を突き詰めたぎりぎりのところで発せられる言葉なのである。今回、東京大学の葛西康徳教授の尽力により念願の来日を実現し、パーカー先生と日本の古代史学界の多くの研究者とのあいだに交流が生じたことは、今後の日本のギリシア史研究にとって寄与するところが大きいと思う。

パーカー教授の生年は1950年、オックスフォード大学を卒業後、同大学院で博士の学位を取得、その後、オックスフォード大学講師、オリエル・カレッジのフェローを経て、1996年よりオックスフォード大学古代史教授 (Wykeham Professor of Ancient History in the University of Oxford) およびニュー・カレッジのフェローとなった。オックスフォードの Wykeham Professor 職は、イギリスだけでなくヨーロッパ、ひいては世界のギリシア史研究・古代史・古典学の研究を支えることを期待される立場である。実際にパーカー先生は、

古典古代研究をとりまく逆境のなかで、誰からも信頼され、ギリシア史研究者のコミュニティを支えてきた稀有な人物であると評価されている。しかし先生は、来日の半年前である2016年の秋に、定年を待たずにこの責任ある立場を退かれた。今回の来日は、ご退職のタイミングをとらえたものでもあったともいえる。

その業績は多数にのぼるが、単著は、オックスフォード大学出版から出された *Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion* (1983年) を嚆矢とする。人類学者メアリー・ダグラスの『汚濁と禁忌 (Purity and Danger)』の影響を受けた、この挑戦的な著書は、穢れの問題を扱う際のスタンダードとなっていく。その後、*Athenian Religion: a History* (Oxford: Clarendon Press, 1996) と *Polytheism and Society at Athens* (Oxford: Clarendon Press, 2005) では、アテナイ宗教についてのそれぞれ通時的・共時的な考察がおこなわれた。アテナイをめぐる、これら2つの著書は、理論的考察に傾きすぎず、かといって個別儀礼の検証にとどまるのでもない。そこには、あくまで事実にもとづいて既存のカテゴリーを疑問視し、可能な限りの総合をおこなう手法が、端的にあらわれている。論証の手堅さと実証性はいうまでもなく、宗教史と銘打ちながらも、アテナイの政治・社会史と一体化している点も特徴的である。それにたいして *On Greek Religion* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2011) では、一転、ギリシア宗教史をとりまく理論上の諸問題が考察される。ギリシアのポリスにおいておこなわれていた宗教は、すべからく、ポリスに集約される「ポリス宗教」であったのかどうか。個々のポリスごとの差異を乗り越えて「ギリシア宗教」について語ることは果たして可能なのかどうか。ギリシア宗教史上の大問題をめぐって、巨人たちの見解を捌きつつ持論が展開される。さらに近著 *Greek Gods Abroad: Names, Natures, and Transformations (Sather Classical Lectures)* (Oakland, CA: California University Press, 2017) では地理上の範囲を小アジアやローマまで広げて、古典期からヘレニズム、さらにローマへのギリシア宗教の伝播と変容をとりあげている¹⁾。

今回の来日では3本の報告が用意された。異教の神々を自らの神話体系のなかに組み入れる習慣を扱う 'Interpretatio Graeco-Romana' (この問題は前述の *Greek Gods Abroad* の第2章で扱われている)、いわゆる「ポリス宗教」をめぐる諸問題を総括する 'Polis Religion: Where Decisions about Religion are Made'、そして 'Divination at Athens (アテナイにおけるト占について)' である。関西では3月25日に大阪大学文学研究科西洋史研究室と文芸学研究室の共催で、Professor Robert Parker Seminar in Osaka: On Divination と題してト占についてのセミナーが、3月26日には古代史研究会春季研究集会(京都大学)において、「ポリス宗教」についての講演がおこなわれた。京都講演は、「ポリス宗教」概念についての弁明とでもいうべきものであった²⁾。宗教とポリス社会との関係を重視するパーカー先生のアテナイ宗教史研究の特質は、ここに訳出した大阪でのセミナー原稿にも色濃く表れている。

パーカー先生は、若いころに源氏物語を愛読され、折に触れて、日本の神道、たとえば伊勢神宮の儀礼システムや、埋葬儀礼にも折々に関心を示しておられた。そこで、大阪でのセ

ミナーでは、お話をうかがってわれわれの側から質問をさせていただきだけでなく、日本の事例についても専門的知見にもとづく応答をご用意できればと考えていたところ、幸い、東アジア権異学会代表で、『日本古代の神と霊』（臨川書店、2007年）の著者である大江篤先生（園田女子学園大学教授）に、日本古代のト占、とりわけト占到たいする国家の管理・独占について一次史料にもとづいてお話しいただくことができた。紹介の労をとってくださった大阪大学の同僚の市大樹先生、通訳の宇久さん、そして会場準備をお手伝いくださった石田真衣・堤亮介両君、多忙のなか参加してくださった皆様に、この場を借りて改めて謝意を表したい。

セミナー当日は、関西だけでなく各地からの参加者を得て、なごやかにかつ活発な議論が進められた。当日の質疑応答を再現することはできないが、以下にコメント部分について、大江篤氏にご寄稿をいただいたので、併せてご覧いただきたい。国家機構の発達に伴って、ト占が国家の管理下におかれ占有されていく過程は、神託の介入にたいする政治の反応を対象とする点で、主報告とよく呼応している。日本におけるト占技術の管理の問題など、比較のうえでも興味深い論点が提出された。

注

- 1) なおこれらの著書については本誌第8号（2008年）に山内暁子「〈文献解題〉アテナイの宗教」について語ること -P. Parker, *Polytheism and Society at Athens* における儀礼と信仰」が、第12号（2012年）に同「〈文献解題〉なぜギリシア人は神々を信じたのか: Robert Parker, *On Greek Religion* における「ギリシア宗教」のありかた」があるのでそちらも参照されたい。前者については『西洋古典学研究』55号（2008年）掲載の拙評もある。
- 2) 「ポリス宗教」概念についての批判として、たとえば Kindt, J., *Rethinking Greek Religion* (Cambridge: Cambridge University Press, 2012).